

近畿方言語法研究 二、三の問題

鎌 田 良 二

時間（年数）と距離

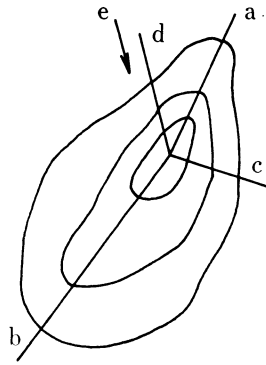
国語史資料の豊富な京阪語は、その移り変わりの姿をかなりはっきりと見ることが出来る。

国語史でみる京阪語の変遷の仕方と、近畿周辺部における方言分布状況との関係とをみようと思う。これをみるについでに二、三の問題をとりあげてみたい。

本稿では特に、史的変遷のはっきりしている語法面で、中央でそれを使われた年代と近畿周辺分布状況との関係。例えば中央では約三百年前に消えた語法が、現在のどこそこの地点にあるということ。中央での年代と、現在その語法を使用する地点の中央からの距離。その地点と隣接地帯との関係など。

分布図からみる語形の移動は語法の場合も語の場合と同称、①辺地はど古い形が残る。②語は地をうようにして移動する。という原則から離れるものではないと考える。この原則から語法の分布図も、(図1)のような形になるものと考えられる。即ち、地図の等高線のような形。方言圏論を説明する場合、「池に石を投げたときの波紋のよう」にということがあるが、実際には波紋のようにきれいな同心円になるのではなく、(図1)のような等高線型に

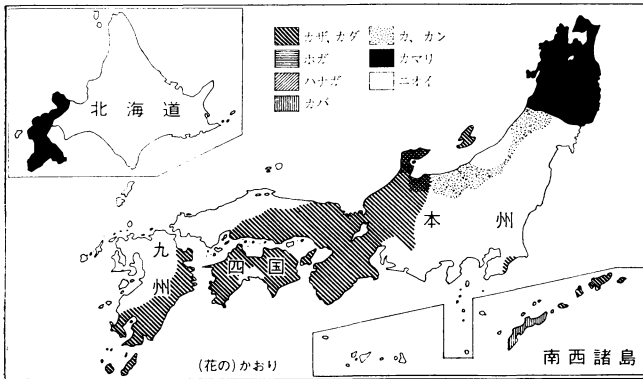
(図1)



なるものと思われる。

aの線が短かく、bの線が長いということは、a線方向に文化的密集地、a線上に都市が多い、b線上是そうではないという場合、a線の果てるところに海がある。あるいは、高い山があるのに対してb線は広い平野であるという場合、c・d線がほぼ等しいのは、aとbとの違いのような条件がなく、ほ

(図2)



ぼ等質の条件であると考ええる。あるいは、e線方向に延びきれないのは矢印のように反対の言語勢力関係が力強く働いているなどの条件を考える。

近畿方言勢力が福井から富山の方に延び、四国の徳島へも延びているのに、兵庫県北部の但馬に延びないのは、鳥取などの中国勢力が根強いとか、古くからの交通の問題などがあろう。

このような立場から、近畿方言語法の姿を史的な面と、分布図との関係からながめて、そこにある問題をみよう。

国語史資料と言語地図とから語の移動に要する年数を考えたものに次のようなものがある。(図2)

「言語史入門」(『日本語の歴史別巻』)(平凡社刊)

「かおり」の方言「カザ」がもっとも新しいことは、国立国語研究所

の分布図（年報 10）で明らかであるが、カザが京都から南は鹿児島、北は能登半島まで達するの何百年かかったであろうか。文献で調べると、カザがはじめてでるのは、十五世紀末の《和玉篇》（長享三年本）の「香、カサ、臭、カサ」である。十七世紀になれば《昨日は今日の物語》に、「火のはたに何ぞくばりたるか、あしきかさするといふ」、《毛吹草》に「かくしつづ契りし中のあらはれて蜜柑のかざはふかきところ」とでてくる。いま、《長享三年本和玉篇》の日付け一四八九年をとれば、それからこんにちまで約五百年たっている。鹿児島から能登半島まで直線距離で一、〇〇〇キロ、その一、〇〇〇キロを占領するのに五百年かかったことになる。

二

否定の助動詞「センからヘンへ」

サ変動詞の「せ」に否定助動詞「ぬ」のついた形からセンとなり、これがさらにヘンに変わる。「ありはせぬ↓アリハセン↓アリヤセン↓アリヤヘン↓アラヘン」

近畿周辺部におけるセンからヘンへの動きについては、鏡味明克氏の「播備国境言語地図論集」がある。

これによると「書きはせぬ」の「書きは」の形をより保っている語形にセンのつく形、カキヤアセン、カキヤセンと、「書きは」の形がくずれてセンが独立してしまつて単にセンのついた形、カケセン、カカセン。同じようにヘンについても、カキヤアヘン、カキヤヘンに対してカケヘン、カカヘンでは、「より保っている形」がいずれも交通不便な鉄道線路よりも離れた辺地にある。

セン対ヘンという点で見ても、ヘンは鉄道沿線に多く、センはそれよりも離れた地点に多い。このことから「書きはせぬ」から「書カセン」型を通じて「書カヘン」へと動いた方向を見ることができると同時に、センとヘンと距離を地図から判断するとせいぜい四、五キロ程度であることから、セン、ヘンの動きの時間的（年代的）間隔の短いことを知る。

滋賀県について、寛大城氏が「近畿方言の総合的研究」(三省堂刊)に次のような表を作っておられる。

方言区	市郡名	伊香	東浅井	坂田	長浜	彦根	犬上	愛知	江幡	八日市	神崎	蒲生	大津	草津	栗太	野州	甲賀	高島	滋賀
湖北		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
湖東		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
湖南		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
湖西		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

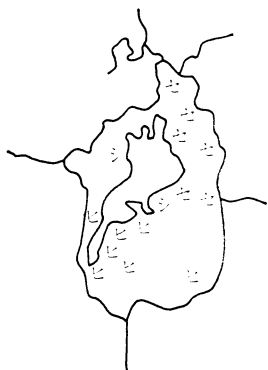
(図3) これを地図で示せば(図3)のようになる。但し、右の表で見る通りヘン・ヤヘンはほぼ全地点にあるので地図から省いて、セン・シン・ヒンの動きをみる。

大津や京都に近い南を文化的とみれば、センからシンをへてヒンとなっていく関係がわかる。図ではセンを「セ」、シンを「シ」とする。

ここではセンとヘンとが一地点で併存していることから見ても、センはやがてヘンになる。私の調査(注1のロ)では、伊香郡と長浜市では中学生は完全にヘンで、老年層でセンとなる。

大阪府については、前田勇氏の調査を同書に掲げている。

次頁の(表)の数字は一地点一形を使うとして地点での多い少ないを郡ごとに百分比で示したものである。





△セン

●セン・ヘン併用

○ヘン

×老年セン・若年ヘン

(図4)

和泉		河内			北摂	
泉南郡	泉北郡	南河内郡	中河内郡	北河内郡	三島郡	豊能郡

六・〇	三・六	〇	〇	〇	〇	〇	セン
-----	-----	---	---	---	---	---	----

五・〇	三・七	四・〇	四・七	四・二	四・一	六・〇	ヘン
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----

二・〇	一六・四	四・〇	八・三	〇	〇・六	五・七	シン
二・〇	四三・六	四六・〇	八・三	二三・一	三四・二	二五・七	ヒン
四・〇	三・六	一〇・〇	四一・七	三〇・七	二一・一	八・六	イン

この(表)によると、まず、大阪市から遠い南の和泉にセンがある。シンは和泉と、その北の河内、その河内でも南の中河内、南河内にある。大阪市をヘン専用地域とすれば、南からセン↓シン↓ヒン↓ヘンの形が見られる。

これに、私の調査を加えると(図4)のようになる。

大阪からセン地域までの距離。北へ、大阪から彦根まで一〇四・五キロ、西へ、大阪から岡山県和気まで一四七・九キロ、南へ、大阪市から泉北郡まで、二〇・九キロ。北と西はずれも、百キロほど、南は二〇キロと、先の(図1)のような条件を考えるのである。(大阪市と京都市との間は四二・八キロ)「日本国語大辞典」(小学館)では「行カセン」は明治になってから。とある。約百年間の動きである。

三

A B A型分布

A B A型は、A↓Bが二つの原点Aがあってそれぞれ別におこった。あるいは、Aから中間地点を通り越して離れたところに別の原点Aを作ったことである。

語の移動として常識的にはA B C型分布、即ち、相隣り合った地点でA語形からB語形へ、B語形からC語形へと移り変わっていくのである。

ところが、語法の移り変わりは、放っておけば自然に同じ方向に変化することから、A↓Bの変化が各地でそれぞれ別に起ることがある。

ここでは、京都または大阪と東京との二つが原点となり、それが近畿に影響している形。

奥村三雄氏の「サ行イ音便」の地図⁽²⁾(図5)で近代京都方言でサ行イ音便がなくなったことについて「関東方言の影響という事を考える可能性は相当大きい」としている。

そして、話シタが、関西に多いシ↓ヒの交替で、京都方言も、ある時期にいったん話ヒタの形になったのだが、子音の脱落でさらに話イタとイ音便になった。それが関東方言の影響で京都に再び話シタの形がもどって来たことである。

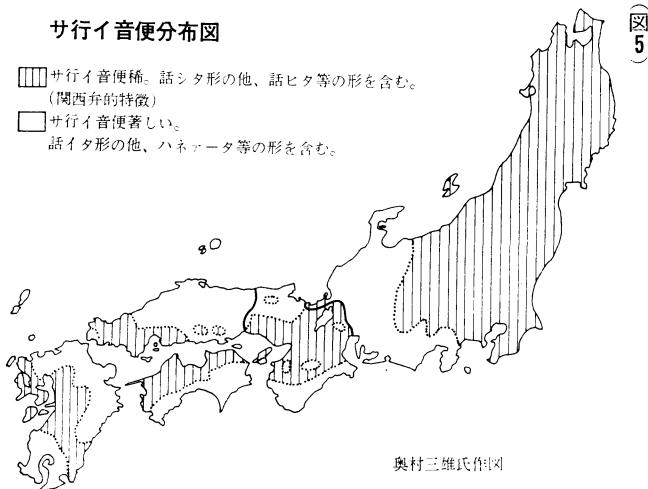
話ヒタの形は現在イ音便地域の周辺部⁽³⁾にある。

これについて(図5)の地図から次のようなことが考えられないだろうか。

シ↓ヒの変化の傾向は広く一般的なものであるから、話ヒタ地域は京都からの線、京都を中心とした方向によってばかり考えるのではなく、関東でもシ↓ヒの傾向があるので、静岡の方のヒは関東から来たものと考えられないだ

サ行イ音便分布図

- サ行イ音便稀。話シタ形他、話ヒタ等の形を含む。
 (関西弁的特徴)
 □ サ行イ音便著しい。
 話イタ形他、ハネアータ等の形を含む。



ろうか。

あるいは静岡の方のヒは関西からのものとしても、広島のものもそうであるかどうか。この場合、まず、京都にいつ頃にヒの形があったか、また、山口などの西から広島へのことばの一般的な移動があるかどうかを考えることが大切であるが、このように特に語法の場合、二つ、三つの原点があり、そこからの変化ということもあり得ると考えておかねばならないだろう。

和歌山県には「(人が)アル」の言い方がある。新宮市の小学校を訪ねた時に、春休み中だったが、「先生アルよ」と言って教員室に案内してくれた子がいた。「昔、男ありけり」とか、「昔々、おじいさんとおばあさんとがありました」式で、古くは生物でもアルであったが、現在の近畿ではオルになっている。「日本言語地図」でみると、アルは和歌山県だけで、近畿の大部分はオルである。大阪府、滋賀県・福井県にはイルが多く、兵庫県は尼崎市に、奈良県奈良市にもイルがある。イル地域は大きく言って都会地であると言えよう。

これについて「言語地図」の「解説」では次のように記している。

「近畿のイルは、オルとの併用地点で、オルが古いとする注記が見られたし、もし、イルに△新しい・上品・まれ▽などの注記があれば、この地図では併用とせず、イルを除いてオルの単用としてある。したがって、この近畿の

イルは、標準語の影響によって拡がった新しい分布と見られる。一方、静岡西部のイル・オルの併存地帯では、併用の際、オルが新しい、上品という注記が多くあった。この地域では逆に、オルが、力を保っているようである」

東京のイルが大阪に移って大阪を中心としてそれが比較的人口の多い都会地、あるいは平地を通じて滋賀・福井へ行ったことになる。京都は古いことばを残すということがあってか、イルはなくオルである。新しい語を受け入れるのは大阪である。

大阪がイルになったのは新しいことと思うが、オルをもとにした存続態、結果態をあらわす「書キオル」「書イトル」はやはりイル地域にはなくなっているようである。

東京語が大阪に直接入り、それが近畿一円に広まらけていることについては、「言語地図」の「助詞『を』を省くか」ということについての「解説」にも次のようにある。

「古くは全国的に助詞を用いなかったが後に中央から助詞の『を』が発展し、その後近畿で助詞を使わない方がいい方が勢力を得て周囲に広まらけたらしい。そして現在また標準語のない方として、東京などから助詞『を』を使ういい方が広まり、近畿地方の中心部にも押しよせている」

四

下二段活用はなぜ根強いのか。

先のアル地域の近く和歌山県に二段活用動詞がある。

二段活用動詞の残存は和歌山県中部地区、日高郡を中心とする地域である。

「近畿方言の総合的研究」によれば、日高郡、西牟婁郡に多く、北の有田郡・海草郡・伊都郡の一部であって、南の東牟婁郡その他には残存しないということである。

そして、「どういう動詞が二段活用形をとっているかについては各地区共通化しない。つまり、ある動詞が、ある地区で強く二段活用形をとるのに、他の地区ではそれが五段活用化しているといった具合である。ただ傾向と言えることは、いわゆる共通語にないようなことは、方言動詞は、二段活用がよく用いられているということである」とある。

奥村三雄氏は「所謂二段活用動詞の一般化について」(『近代語研究第二集』)に、「動詞一般として、上二段活用的一段化は、下二段活用の場合より早かっただろう。一般に、音節数の少ない動詞は、一段化が早かったであろう」としている。

また、九州方言学会の「九州方言の基礎的研究」の中の「九州方言の総括的解説・文法」の項によると、二段活用の中でも下二段活用が著しく、九州のほぼ全域で見られる。上二段活用は西南部では上一段化しており、少年ではさらに、五段型活用(見ラン・見レ・起キラン・起キレ)となってきた。が、北九州では、上二段活用が下二段型活用(起ケン・起ケタ・落テン・落テタ)となると記してある。

奥村氏の説と、九州での現状から、下二段活用は根強い。北九州の上二段化は、下二段が強いための類推によるものかと思う。

これに対して、和歌山県で語が一定していないということは、一般に二段活用がくずれているということになる。

しかし、なぜ、下二段活用が根強く残るのであるうか。

これについて次のように考えてみてはどうだろうか。

下二段活用の受クル・捨ツルなど語幹にUのくるものが、ukuru, sutru と、-u-uとUの続く形である為に、音韻の関係で残りやすいのであると。

「日本言語地図」の「きゅう(灸)をすえる」と「数える」とをくらべてみると、「すえる」の方は九州全地域にスルルの形(鹿児島に *surru*、長崎に *YAKU*、熊本に *YAKU* とスルルとが併存する)があるのに対して、「数える」は、ロー型のものでない為か、カゾユルは大分県南部・宮崎県の海岸部・熊本県の一部にあるだけである。また、スルルの方は和歌山県にもあるがカゾユルの方は和歌山県にはなく、ヨムである。

五

サ変からサ行上一段活用へ

土井忠生・森田武者「新訂国語史要説」に次のように記してある。「漢語のサ変動詞のうち、『通じる』『感じる』『信じる』などとザ行上一段に活用させたり、『訳す』『愛す』『解す』などとサ行四段に活用させたりする」とは近世にはじまり、明治以後もひきつづいて盛んであって、今日では近畿から東に広く行われている。このように転じたのは、漢字一字で書かれる漢語を語幹とするものに多く、ことに、ザ行上一段活用に転じたのは、『信・感・論・演・転・弁』などのように末尾に拗音をもつものや、『通・高・封』などのように才段やウ段の長音に終るものに多い」

これを近畿一般に調査したところ、近畿一般には「信ジル」「通ジル」であるといつてよいが、はっきりと、「信ズル」「通ズル」が老人で、「信ジル」「通ジル」が若い人(中学生)であると答えたのは、兵庫県美方郡浜坂町、和歌山県橋本市柏原、石川県金沢市高岡町、能美寺井町、富山県永泉市朝日町、飯久保町、新川郡立山町、鳥取県米子市愛宕町、岡山県新見市草間・久米郡中央町であった。

中学生で一クラス中の人数による調査では次の通りである。

男山第二中学(京都府綴喜郡八幡町)・相生中学(兵庫県相生市野瀬)・大宇陀中学(奈良県宇陀郡大宇陀町)・

入善中学（富山県下新川郡入善町）、これら、いずれも上一段活用になっていると言ってよいだろう。（上記、「通

ジル」男山中学で四十七名中、四十五名が使用の意）

近畿周辺部または山間部の中学校の状況が右の通りである。僅かながらも中学生に「通ズル」「信ズル」があり、これらの地点での老年層では「通ズル」「信ズル」であるということであるが、数の上では調べていない。

語 校 名	通 ジ ル	通 ズ ル	信 ジ ル	信 ズ ル
男 山 中 学	45/47	2/47	45/47	2/47
相 生 中 学	34/36	2/36	33/36	3/36
大 宇 陀 中 学	31/35	4/35	29/35	6/35
入 善 中 学	43/44	1/44	44/44	0/44

六

形容動詞終止形「な」

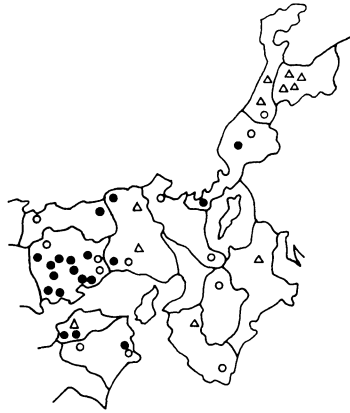
佐藤喜代治氏の「国語史」（桜楓社刊）に、形容動詞終止形「な」について。

「形容動詞は（江戸時代）前期の上方方言では終止形・連体形とも「なり」から変化した『な』が用いられたが、江戸語では、終止形は『な』の代りに、『である』から変化した『だ』が用いられる」とある。

「近畿方言の総合的研究」の「兵庫」では次のように記してある。

「但馬には、シズカナという終止形があり、シズカナサァナ（静かだそうだ）などと使う。そして、シズカナカラ

(図6)



○な終止

△マイ

●な終止・マイ両方あり

ア(静かだろう)、シズカナカタ(静かだった)、シズカナケエ(静かだろう)などと発展する。播磨も同様にゲンキナヤロ(元気だろう)を使う

私の調査では、「な終止形」は、三重県、滋賀県の方には見当らず、京都府、奈良県の山間部にあり、多いのは、岡山県や兵庫県西部である。(図6)の通りであるが、地点名を記すと次の通りである。

京都府舞鶴市(老)、綴喜郡八幡町、兵庫県相生市、赤穂市、美方郡浜坂町、奈良県天理市、和歌山県東牟婁郡本宮町、福井県鯖江市、遠敷郡上中町、足羽郡美山町、石川県能美郡寺井町、鳥取県米子市、岡山県岡山市、津山市、高梁市、新見市、備前市、笠岡市、和気郡日生町、邑久郡虫明、浅口郡寄島町、小田郡矢掛町、上房郡北房町、阿哲郡大佐町、真庭郡勝山町、英田郡美作町、久米郡中央町、徳島県小松島市、那賀郡羽浦町、三好郡三野町、香川県三豊郡仁尾町、仲多度郡琴平町

七

打消意志「マイ」

吉田金彦著「現代語助動詞の史的研究」に戯曲の会話における「う・よう・だろう・まい」の用法が記されている

る。それによると「まい」は明治期に多く、大正以後は減じている。「近代文体の確立以後は、『まい』は方言的色彩のもとでか、あるいは、古風な言い廻しか、あるいは、その他特殊な場合にしか使われない傾向があるようだ」として、次の表を掲げている。

	明治期	大正期	昭和期
う	一二四	一〇九	一一〇
よう	二七	三一	九
だろ	一五 (九%)	四五 (二二%)	一八 (二二%)
まい	二九 (二五%)	一六 (八%)	一二 (八%)
合計	一九五	二〇一	一四九

() 内は合計に対する%。

明治は明治二四年の尾崎紅葉「夏小袖」から明治四四年木下李太郎「和泉屋染物店」までの四作品。大正は大正三年久米正雄「牧場の兄弟」から大正一三年正宗白鳥「人生の幸福」までの四作品。昭和は昭和二年久保田万太郎「大寺学校」から昭和二五年福田恒存「キティ颱風」までの四作品からとっている。(各作品とも二〇ページ分)

「近畿方言の総合的研究」の「総説」に次のようにある。

「マイは、行コマイ、見ヨマイのように、オ、ヨオのあとへマイを続けて表現するのが近畿的である。だからその場合、推量はオ・ヨオが担当するわけだから、マイは単なる打消に過ぎないことになる。けれども、三重、和歌山あたりでは行カマイ、見ヤマイ、コオマイ、セエマイとなったりして、単なる打消ともいえなくなる。いずれにしても、マイの接続は極めて不安定で、但馬では、知ラマイ、シルマイ、シロマイの三つの形が行われている」

これも私の調査では(図6)の通りであるが、先の「形容動詞な終止形」の図と同じような形になる。この(図6)では、マイがミャアなどくずれた形も採っている。

なお、使用地点は次の通りである。

三重県一志郡一志町、兵庫県赤穂市、美方郡浜坂町、朝来郡山東町、神崎郡福崎町、和歌山県橋本市、福井県鯖江市、遠敷郡上中町、石川県金沢市、石川郡美川町、富山県新湊市、氷見市、礪波市、西礪波郡福光町、岡山県岡山市、津山市、総社市、高梁市、新見市、笠岡市、邑久郡虫明町、浅口郡寄島町、上房郡北房町、真庭郡勝山町、英田郡美作町、久米郡中央町、徳島県小松島市、香川県観音寺市、三豊郡仁尾町、仲多度郡琴平町。

これによると、先の「形容動詞な終止形」と「マイ」とは、ともに、三重、滋賀、京都など東側にはごく少く、北陸と、兵庫県西北部にあり、近畿方言圏からはやがて姿を消していくものであろう。しかし、両方とも岡山県には根強く残っている。

○

先の「かおり」の図や、「サ行イ音便」の図のように全国的な図の場合は、京都・大阪からの距離をはかり、京都・大阪では、約三百年前になくなった形が現在○○キロ離れた地点にあるということが言えるだろう。

しかし、「近畿地方」と限って地図を描いた場合、京都・大阪からの距離を地図上の直線距離で測ってよいものか不安である。

同じ距離であっても鉄道沿線の場合と、山をへだてた場合とでは違いうしろし、同じ平地であっても人口の状態によっても違いうしろから。——本稿(一)(二)

京都・大阪語が中間地点を飛んで直接、東京に影響を及ぼしているとともに、東京語が京都・大阪に飛火し、それが関西で燃えひろがっている状態をも見なければならぬ。そのひろがり方、移動のし方、方向。

それとともに、静岡西部のように従来から東西方言の接する地点でこれらの形の状態という点にも問題がある。——本稿(三)

近畿方言圏内の交通状況の変化（通勤圏など）がはなはだしいことともに年令層による相違と、変化に要する年数なども考えることが大切である。

注

(1) (イ)拙稿「近畿・中国両方言境界地帯における否定・不可能表現」(「甲南国文第一三三号」昭四一・一)及び、昭四〇年頃の臨地調査と知人への問い合せ、通信調査などを含む。(ロ)その後、昭五〇年までの同様の調査と学生の調査報告。

(2) 「関西弁の地理的範囲」(「言語生活第二〇二号」昭四三・七)

(3) 奥村三雄氏「サ行イ音便の消長」(国語国文第三七卷一号「昭四三・一」)によれば、話ヒタの形は、「近畿方言叢書」「NHK資料」から愛知県南設楽郡・海部郡・静岡県安倍郡等各地に、かなり広く認められるが、その辺から東には存しない。

拙稿「サ行五段活用動詞のイ音便——西日本方言について——」(「甲南女子大学研究紀要第四号」昭四三・三)岡山県各地で「傘セエテ」などがあり、広島県福山市本郷では「傘サヒテ」「出ヒテ」「浮ヒテ」「起ヒテ」「流ヒテ」などとなる。